

春

小川未明

青空文庫

「なにか、^{たの}楽しいことがないものかなあ。」と、おじいさんは、つくねんとすわって、^{かんが}考え込んでいました。

こう思^{おも}っているのは、ひとり、おじいさんばかりでなかった。町^{まち}の人々^{ひとびと}は思^{おも}い思^{おも}いにそんなことを考^{かんが}えていたのです。しかし、しあわせというものは、不幸^{ふこう}と同じ^{おな}ように、いつだれの身^みの上^{うえ}へやってくるかわからない。ちようど、それは風^{かぜ}のように、足音^{あしおと}もたてずに近^{ちか}づくものでした。また、だれもかつて、しあわせの姿^{すがた}というものを見^みたものはなかったでしょう。

こうして、たくさんの人^{ひと}たちが、てんでに自^じ分^{ぶん}の身^みの上^{うえ}にしあわせのくるのを待^まっていました。

「しあわせは、いま、どこを歩いてあるかしらん……。そしてだれのところへ、やってくるかしらん……。」

こう考えると、まったく、不思議なものでした。そして、このしあわせにも、大きなしあわせと小さなしあわせとあったことは、むろんです。けれど、ダイヤモンドは、いくら小さくても美しく、光るように、それが、たとえば、小さなしあわせであっても、その人の一日の生活を、どんなにいきいきとさせたかしれません。

おじいさんは、なにか楽しいことがあるのを待っていました。いつものごとく火ばちにあたって考え込んでいました。すると、毎日のように、あちらの町の方から起こってくるいろいろな音色が、ちようど、なつかしい、遠くの音楽を聞くように、おじ

いさんの耳みみに達たつしてきたのでした。

おじいさんは、だまって、じつとして、その音ねに耳みみを傾かたむけていました。すると、このいろいろの音色ねいろの中から、ひとつ離はなれて、細ほそく澄すんだ音ねが、おじいさんの魂たましいを引きひけるように、呼よびかけているのが聞きこえたのです。それは、笛ふえの音ねに似にていました。

「あれは、なんの音おとだろう？」と、おじいさんは、思おもいました。おじいさんは、その音おとを聞きいているうちに、だんだん、気持きもちちがさわやかになってきました。そして、家いえにばかりいたのでは、気きがふさいでしかたがない、町まちへ出でて、歩あるいてみようという考かんがえが起おこったのです。

「寒さむいけれど、降ふりもしまいな。」と行って、おじいさんは、つ

えをついで、とぼとぼと外へ出かけました。

いつ歩いてみても、町はにぎやかです。しかし、風が寒いので、通る人々は、道を急いでいました。

おじいさんは、右を見たり、左を見たりしてきますと、四つ辻の角のところで、福寿草を道に並べて売っていました。

「ああ、これは、いいものが目にはいった。」と行って、おじいさんは立ち止まり一鉢買って、喜んで家へ帰りました。おじいさんは、それに水をやり、日当たりのいいところへ出してやりました。つぼみは日にまし大きくなった。おじいさんは、花の咲くのを楽しんだのであります。

* * * * *

また、同じ町に住んで、このようにじつとすわって、しあわせを願ったものは、おじいさんばかりではありません。

哀れな母親がありました。その日の昼前のこと、子供が見えなくなつたのです。八方探したけれどわからなかつた。子供は、まだ、幼かつたので、道を迷つて、知らぬ間に、どこか遠方の方へいつてしまつたとみえます。

「お母さん、お母さん……。」と叫んで、どんなに悲しがつているであろうと思うと、母親は、子供がいなくなつてから、夜も、昼も案じ暮らしていたのでした。

「どうかして、帰つてきてくれないものか。」と、ひたすらに祈っていました。

その日も、彼女は、ぼんやりと家の中で、子供のことを思いながらすわっていました。すると遠くの遠くから、町の物音が聞こえてきました。彼女は、聞くともなく、その音に耳を澄まして聞いていると、たくさんの人たちが、うず巻いている光景が目映ったのでした。すると、たちまち、ひとつ小さな、細い、さびしい音が別に耳に聞かれたのでした。それは、ちようど、道に迷った、自分の子供を思わせたのであります。

「ほんとうに、あんなように、私の子供は、みんなから離れて、道に迷っているのだ……。」と、母親は、目にいっぱい涙をためて、熱心に、この小さな、ひとり離れて聞こえる音に、耳を傾けていました。

その小さな音は、あてもなく、広い道の上を漂っているのです。しかし、思いなしか、だんだん、その小さな音は、こちらへ近づいてくるような気がされたのです。

「ああ、あの音が、私のかわいい子供であってくれればいい。」と、哀れな母親は思いました。

彼女は、もはや、こうして、じつとして、家の中にすわっていることができなかった。それで、戸口から外へ出ました。

もう、日は暮れかかって、町には、燈火がついていました。

彼女は、あてもなく、にぎやかな通りの方へ歩いていった。

このとき、淡いもやのかかっているうちから、小さな黒い影が現れて、こちらへ近づいてきました。それはまちがいもなく、いま

まで、死にももの狂いになって探していた、かわいい子供でありました。

母親は、駆け寄って、子供を抱き上げると、うれしさのあまり、ものをいうこともできなく、二人は抱き合って、しばらく泣いたのであります。

* * * * *

この不思議な、小さな音は、いつたいなんでありましようか？
いつしか、この小さな音は、町の人たちにだんだんと気づかれるようになりました。

「このごろは、毎日、晩方になると、遠くで、いい音がきこえますね。あれはなんの音でしようか？」

「それは、どちらの方からですか。」

「町の南の方からするときもあれば、また、夕焼けのした西の海の方からすることもあります。」

「こんど、私も聞いてみましょう……。」

ある日のこと、一人の町人は、その笛の音を頼りに歩いてゆきました。町を離れ、野を越えて、その音は、あちらから聞こえてきたのでした。

「まあ、なんとというたいへんに遠いところから聞こえてくる音だろう……。」

ついに海のほとりへ出ました。すると、あちらのがけの上で、少年が、海を見渡しながら笛を吹いているのでした。

「まあ、なんという危あぶなかしいところへ、あの少しょうねん年は乗のつて、
 笛ふえを吹ふいているのだらう。そして、また、なんという、澄すんで、
 遠とおくにまで響ひびく笛ふえの音おとだらう。」

町まちの人は、驚おどろいて、帰かえつて、そのことを近きんじよ所ひとの人ひとたちに話はなし
 ました。みんなは、こんどいつしよにいつて、その少しょうねん年ねんを見み
 とどけようといいました。そして、ふたたび笛ふえの音ねが聞きこえたと
 きに、町まちの人ひと々は、いつてみると、少しょうねん年ねんの姿すがたはそこになか
 ったが、そのがけには、美うつくしい緑みどりいろの草くさが一面めんに芽めを出だして、
 あたたかな風かぜが海うみを渡わたつて吹ふいてきました。みんなは、はじめて、
 あの笛ふえは、春はるの使つかいが吹ふいたことを知しったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

※表題は底本では、「春《はる》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>